

す
ご
い
機
械
我
妻
直
弥

作品概要

アニメーション映画『話の話』（ユーリ・ノルシュテイン、一九七九、ソ連）は、物語る行為への豊かな示唆を含んでいる。作中では、アパートに取り残された狼が、三つの話の光景を見つめる。詩人のいる漁村、タンゴを踊る人々、雪景色。ここで狼は、これら三つの話に対し、超越性を持っている。つまり、三つの話は、狼のアパートの話に対する劇中劇といっても良い。

しかし、アパートに現れた輝く戸をくぐると一転、狼は、先程の話の空間に入ってしまう。そこで泣き叫ぶ赤ん坊を連れ去り、森に逃げ込んだ狼は、次の子守唄を歌い掛ける。

「ねんねしないと灰色の狼が来るよ（中略）／脇腹をつかまえて森に連れていくよ／ヤナギの茂みの中だよ」

狼はまるつきり、話の中に組み込まれ、語られるものになってしまった。ここで狼の超越性は、すっかり崩れてしまう。

そして舞台の上で俳優は、まるつきり狼になる。「俳優——役」の関係は、「語るもの——語られるもの」であるはずが、俳優はテキストを物語ると同時に、俳優の身体は物語りの中に入ってしまう。そこには、語るものの超越性などものはやない。それゆえ私たちの認識は、「俳優——役」、「舞台——テキストの空間」の間を行き来する。舞台上にあるものは、ひどく曖昧に存在し続ける。

しかし、認識レベルから知覚レベルに逆行すると、ものごとは途端に単純になる。知覚することは、「俳優——役」、「舞台——テキストの空間」という尺度から逃げ出し、単純な物質を見つめる。つまり、誰と分からず、どこと分からなくても、物語るのは、今ここにいる人物であり、彼らがいるのは、今ここにある「劇場」に他ならない。彼らは純粋な人物として、「劇場」は純粋な空間として存在する。そこで成されるのは、特定の人物や場所に帰属しない純粋な語りである。

そして純粋な語りとは、純粋な人物の純粋な声によって行われる。ちやうど、中島敦『山月記』にて、李徴²が虎であろうとなかろうと、李徴の姿が叢中から現れずとも、李徴の虎になる語り²が遂行されるようである。

「俺のくるま」
「犯罪人」
「金星人」
「すごい機械」
「北京の猿」
「オーソンとアダムスキー」
「運河のドライブ」
「病気」
「結婚式」

糟谷ちか（かすやちか）
糟谷妃星（かすやきらら）
大倉克夫（おおくらかつお）
金田俊彰（かねだとしあき）
阿部美羽（あべみう）
阿部明子（あべあきこ）
男
女
従業員1
従業員2
客
店員
労働者たち
先生
心菜（ここな）
少年
伝道者

「俺のくるま」

大倉
美羽

男
女

1

劇場には、二つの空間。映画館と、そこで上映される映画の空間。

映画館では、大倉・美羽、並んで、映画を観ている。

美羽、ポップコーンを食べている。

映画では、男・女、並んで止められた一台の車を見る。

男 おれの車さ。

男 69年型ダッジ・チャージャー。

男 ダーティ・メリー／クレイジー・ラリー。観たことは？

女 いいえ。

男 三人組の強盗の逃走劇さ。こいつでカリフォルニアを逃げ回る。

男 三人は警察を振り切って、行く末の幸福を夢見る。俺たちの前に遮るものはない。その瞬間。

男 列車に衝突、車は炎上。三人とも丸焦げさ。

女 実のない話ね。

男 この話の教訓は三つ。一、最後まで油断するな。二、前を見て運転しろ。三、悪は滅びる。

男、車のエンジンをふかす。

女 遅いわ。

男 400万馬力、60マイルまでたった6秒。当時では驚異の数字だ。(ボンネットを開いて) V8。

女 いままで何人の女がこれに？

男 やだな、おれを誤解してるよ。君が初めての乗客さ。

女 嘘ばかり。

男 本当さ、先週買ったばかりだからな。

女 悪い人。

男 (ボンネットを閉じて) どうだい、乗り心地を試してみるのには。

女 すぐに返事はできないわ。私は車に酔いやすいの。

男 そうか、それはいけないな。

男 じゃあまずは見せてやろう。おれの一流のドライビングを。

男、ボンネットに女を寝かせる。

二人、抱擁する。

男 目を閉じてごらん。

女 一体私に何する気。

男 おれの運転が信じられないかい。

女、臉を閉じる。

男、自分のベルトを抜き、女の手首を縛る。もう端を、ドアに結び付ける。

男 借りるよ。

男、女のベルトを抜きとり、もう片手も同様にする。
女は身動きが取れない。

女 (嬉しそうに) やだ、なにをするの。

男 まだ目を開けるなよ。

男、車に乗り、発進させる。

男 ハイヤ。

女 え、ちよつとなにこれ。

男 どうだ、これが400万馬力だ。

女 これは、どういうつもり。

男 おっとこれは気づかなかった。子猫ちゃん、そんなところでお昼寝かい。

女 降ろして。降ろしてちょうだい。

男 ボンネットの寝心地はどうだい。

女 これって冗談のつもり。あなたのセンスは最低よ。

男 (フロントガラスを指先で叩いて) グッドモーニン・ア・プッシーキャット。

女 (男を見て) 変態。

男 油断するな、前を見る。

女 あ、列車にぶつかるわ。やめて。

女 ……

女 あーぶつかる。

大倉 はは。

美羽 (大倉をまじまじと見る)

2

劇場には車。赤信号で止まっている。

大倉、車を運転、美羽、助手席に座っている。

美羽、ポップコーンを食べている。

美羽 なんて。

大倉 え。

美羽 なんて、あれを選ぶかな。

大倉 どれ。

美羽 映画。

大倉 ……好みじゃなかった?

美羽 考えてほしいの。

大倉 何を。

美羽 約一年ぶりに、娘と会う。そこで、映画を観る。

大倉 観たよ。

美羽 高二的の娘。

大倉 大きくなったね。
美羽 何を観るのがいいと思う。

大倉 違ったかな。

美羽 なにが面白いの。

大倉 だって、女が吹っ飛ぶだろ。ボンネットに腕だけ残して。笑うだろ。

美羽 あれ本物？

大倉 そんなわけないよ。

美羽 リアルだった。

大倉 人形だよ。CGには出ない味がある。

美羽 なにが面白いの。

大倉 つまらなかつた？

美羽 考えてほしいの。

大倉 ……

美羽 つまり、配慮が足りない。

信号が青に変わる。

美羽、前を指す。

大倉、車を発進させる。

大倉 美羽も、ママに似てきたね。

美羽 そういう話じゃないの。

大倉 ……

美羽 私とか、ママとか。そういう話じゃないの。

美羽 いわば、女性全般への配慮が足りない。

大倉 ……どうするべきだったかな。

美羽 ……

大倉 パパは、美羽と会えるだけで嬉しいよ。年に一回でも、それは嬉しい。

大倉 ただ、折角だから、美羽の希望を聞いておくべきだった。

美羽 ……

大倉 どうするべきだったかな。

美羽 ……

大倉 今後の参考にするから。

美羽 ……ママが、もうやめてって。

大倉 何を。

美羽 パパと会うのはやめてって、言ってた。

大倉 娘と会ったっていいじゃないか。

美羽 うちではね。パパって言ったらいけないの。

美羽 ママの機嫌が悪くなるから。

大倉 ……

美羽 パパと会った日にはもっと。

大倉 じゃあ、ママに言わなきゃいいよ。

美羽 ……

大倉 こつそり、ね。いまぐらいのペースでいいから。

美羽 ……そういう話じゃないの。

大倉 なに、配慮が足りない？

美羽 ……

大倉 女性全般への。

美羽 ……いいから、無理だから。

大倉 でも、こっそり来れば。

美羽 やめてって。

大倉 (美羽を見て) いや——

美羽、前を指す。

赤信号。

大倉、車を止める。

美羽 (シートベルトを外し) ここでいい。

大倉 なんで。角まで送るよ。

美羽 いい。

大倉 そこまで。

美羽 いい、ママいるから。

大倉 あ、じゃあこれお小遣い。(二万円札を差し出す)

美羽 ……

美羽、車を降り、去る。

青信号。

大倉、助手席に一万円札を放る。

大倉、車を発進させ、次第に速度を上げる。

大倉、ボンネットの上に架空の女をイメージし、フロントガラスを指先で叩く。

「犯罪人」

糟谷

妃星

従業員1

従業員2

客

1

劇場に弁当屋が現れる。

糟谷・従業員1、狭い厨房に立ち調理している。

妃星、レジ横の椅子に座っている。

従業員2、おにぎりを並べている。

客、レジ上の弁当の写真を眺めている。

客 すいません。

従業員1 はい。

従業員1、厨房からレジにやって来る。

客 生姜焼きひとつと。特のり二つ。ください。

従業員1 はい、お待ちください。

従業員1、厨房に戻る。

従業員1 生姜焼きイチ、特のり二。

客、椅子に座る。妃星が気にかかる。

客 お遣い？

妃星 そうだよ。

客 あら偉い。お姉ちゃんいくつ。

妃星 五歳。

客 ま、そんな歳でお遣いなんて。どれ食べるの。

妃星 幕の内塩鯖。

客 へえ、偉いね。お母さんに買ってあげるの。

妃星 そうだよ。

客 今日の晩ごはんかな。

妃星 ママ、病気にしてんのよ。

客 あらあら。

妃星 もうすぐ、死んでしまうわ。

客 あら、ママ、何があったの。

妃星 私の半生は、母とともにあった。むしろ、母しかいなかったと言ってもいいわ。母は私に身を捧げ、私は母のために生きる。素晴らしい母親愛ね。

客 まあ、素晴らしい母親愛ね。

妃星 全てはあの夏、あの夏の夜から始まった。いいえ、全てが終わったの。あの夜、母は父から逃げ出した。

客 何があったの。

妃星 何のことはない、人が変わってしまっただけよ。私を抱える彼女の腕は、痛ましい痣でいっぱいだったわ。

客 まあ。

妃星 私たちは身一つ、社会の迷誤に放り出された。でも、それが何だっていうの。健全な体をもって、私たちは生きてきた。

客 遅いわね。

妃星 それなのに。一体、どうしてこうなったのかしら。私たちの幸福は、どこへ行ってしまったのかしら。鯖に当たった母は、まもなく死んでしまう。だから、母の最期の願い。せめて、ちゃんとした鯖を、純粋な鯖を最後に食べたい。なけなしの金を握りしめ、私は隣り町へのバスに乗った。

客 そうだったのね。

妃星 しかし、ついぞその願いは叶わないわ。ある停留所に停まったとき。男が、私のポケットから、なけなしの金をすってった。

客 まあ。

妃星 男はそのまま降りていく。私は、呆気にとられてしまった。正気に戻ったときにはもう、バスは走り出していたわ。

妃星 あの下賤な男。鼠のように卑劣な男。あのいやらしい手。……私はあの男を、決して許さない。客 ひどいわ。

妃星 だから、私は買えない。母の、最期の願い、幕の内塩鯖。

客 ……それいくら。

妃星 税込720円。

客 (財布を出す)

妃星 税抜きでいいよ。

客 まあ、なんてつまましい。

妃星 税抜き677円。

客 (金をだす)

従業員2 またそうやって、小銭稼いで。

客 え、なに。

従業員2 この子の言うこと、信用しないでください。こうやって小銭稼ぐんで。

客 あら冷たい。そんなことないよね。

妃星 ……

客 あらやだ。

従業員2 すいません、どうしても治らなくって。

客 年寄りだからって、馬鹿にして。そうやって人を騙してきたのね。

従業員2 妃星ちゃん、ほら謝りなさい。

妃星 ……

客 まあ、なんてふてぶてしい。謝ることもできないなんて。親のしつけがなくなってないのね。

従業員1・2、作業をやめ、糟谷に顔を向ける。

糟谷 あ。(会釈する)

従業員1、レジへ。

従業員1 生姜焼きイチ、特のり二、お待たせしました。

客、弁当を受け取る。

客 (糟谷に向かって) 汚い手。

客、去る。

従業員2 いい加減にしなさいよ。お客さんに迷惑かけない。

妃星 ……

従業員2 糟谷さんも、なんか、ほら。

糟谷 あ、はい。

糟谷 ……妃星、駄目よお。

糟谷 ……知らない人と話しちゃ駄目よ。

各々、作業に戻る。

従業員1、糟谷の隣に立ち、小声で。

従業員1 妃星ちゃん、ちよつとあれじゃない。

糟谷 はい。

従業員1 あんまり職場についていうか。あんまり連れ回すのって、ね。

糟谷 ああ。はい。

従業員1 ……

糟谷 そうですね。

従業員1 糟谷さんも大変だろうし、あの子にとつても、あんまり、ね。

糟谷 ええ。はい。

従業員1 保育園とか、行かせないの。

糟谷 ああ、保育園。

従業員1 せつかくの子供なんだから、育てたいってのは分かるけど。

糟谷 ええ。

従業員1 でも、預けるのもいいものよ。ほら、糟谷さんなら入れるでしょう。

糟谷 どういうことですか。

従業員1 だからほら、審査が通り易いっていうの。費用だつてタダでしょう。

糟谷 ……

従業員1 生活保護受けてると。

糟谷 ああ、そうなんですね。

従業員1 そしたら、精神的余裕も出てくるし。

糟谷 そうですね。

従業員1 ……

糟谷 でも別に、困窮してはいないですよ。

従業員1 ああそう。

従業員1 ならよかった。

妃星、惣菜のうちの、唐揚げをさつと取り、盗み食いする。

従業員2、それを見つける。

従業員2 汚い手で。

「金星人」

糟谷

妃星

大倉

金田

店員

劇場は夜のマクドナルド。

糟谷、カウンターテーブルについている。

妃星、カウンターテーブルの上で、おもちゃの車を走らせている。

糟谷、携帯電話で通話している。

相手・大倉、テレクラにいる。

金田、劇場の隅で、糟谷と大倉を盗み見ている。

大倉 すぐについてわけでもないんだよ。

糟谷 ……

大倉 ただちよつと、ゆくゆくはこっちに。

糟谷 ……ありがとう。けどちよつと、難しい。

大倉 今年の暮れになってもいい。来年のお盆でも構わない。すぐについてわけでもないんだよ。

糟谷 時間の話じゃないのよね。

大倉 違うか。

糟谷 時間なんてね、どうでもいいの。この星の一日は、終わらないほど長いんだから。

大倉 じゃあ、何が問題かな。

糟谷 ……

大倉 そうか、お金か。

大倉 交通費くらい、おれから出すよ。いくら。

糟谷 往復で二千万かな。

大倉 二千万か。

糟谷 あんまり、無理しなくても。

大倉 二万くらい、おれから出すよ。

糟谷 ありがとう。でも、お金の話じゃないのよね。

大倉 違うのか。

糟谷 そんなのは些末なことよ。

大倉 ……

糟谷 これは、モチベーションの問題なの。

大倉 モチベーション。

糟谷 私は、大倉さんとうちよつと、お話しするのが好きなのよ。

大倉 ありがとう。

糟谷 大倉さんは、つまらない？

大倉 そんなことはないよ。

糟谷 私、こうするだけで十分いいの。

大倉 おれも、いいよ。

糟谷 だから、会いたいわって言われても、なんでだろうって思ってしまう。

大倉 それは、ちかちゃんを愛してるからだよ。

糟谷 ありがとう。

大倉 ちかちゃんは、おれのこと愛してない？
糟谷 そんなことはないの。

大倉 だから、ね、ちよつとだけ。

糟谷 愛していたら、会わないといけないの。
大倉 え。

糟谷 会うってことが、愛するってこと。

大倉 そんなことは、ないけれど。

糟谷 私、こうするだけで、十分いいの。

大倉 ……

糟谷 大倉さんは、それじゃあ足りない？

大倉 そんなことは、ないよ。

糟谷 私、真剣に悩んでるのよ。

糟谷 一体、愛とは何だろう。愛とは、いかになし得るのだろう。

店員 76番のかたあ。76番のかたあ。

糟谷、ハンバーガーを取りに行く。

店員 テリヤキバーガー、ハッピーセットの、チーズバーガー、お待たせしました。

糟谷 (妃星に) おもちゃは。

妃星 ランチアストラトス。

店員、トレーにおもちゃをのせ、糟谷へ。

糟谷、ハンバーガーを受け取り、席に戻る。

糟谷 じゃ、電話切るね。また今度。

大倉 待つてくれ。

糟谷 ……

大倉 分かったよ。会いたいなんてもう言わないよ。

糟谷 分かってくれれば、構わないのよ。

大倉 ちかちゃんに悪いことした。

糟谷 いいえ。

大倉 おれはつねづね、気持ちがあく回ってしまうようだ。愛しているというのに。いや、愛してるからこそ、無為に傷つけてしまっただなあ。ほとほと自分が嫌になる。しかしね、これだけは、分かってほしい。(糟谷、ポテトを食べる) おれは君に、卑しい気など、抱かない。心底愛してるんだよ。ちかちゃんは、分かってくれるかい。

糟谷 分かったわ。

大倉 分かってくれて、嬉しいよ。だから、悩むことなんて、ないんだよ。

糟谷 ええ、悩みが晴れてくわ。

大倉 今日の明け方、明けの明星をみたよ。手振ってみたんだが、ちかちゃんは気づいたかな。

糟谷 いいえ。

大倉 そりゃそうか。おれになんて、気づかないよな。

糟谷 こんどちよつと目え凝らしてみるわ。

大倉 じゃあ、電話してみるよ。

糟谷 電話。

大倉 明けの明星を見つけたら、ちかちゃんに電話してみるよ。それを合図に、地球に目え、凝らしてくれたら、おれたちは見つめ合うってことさ。

糟谷 素敵だわ。

大倉 電話、するから待っててね。

金田、劇場の隅からやって来る。

金田 あの。失礼かとは、思いますが。ひとつ、質問しても良いでしょうか。
大倉 なんですしょう。

金田 先程から、お話を伺っていますと、どうやら、ちかさん？

糟谷 ちかです。

金田 ちかさんは、こちらの人間でないというか、地球にお住みでないようか。

大倉 はい。ちかちゃんは金星人です。

金田 あ、なるほど、金星人。色々と、合点がいきました。

糟谷 あの。

金田 はい。

糟谷 あまり本気にしないでください。これはあくまでお芝居なんです。

金田 あ、お芝居。そうですか。更に、合点がいきました。

大倉 偶然、平凡な男のもとに、金星人から、間違い電話が掛かってくる。

金田 不思議なことも、ありますね。

大倉 一本の電話を期に、二人は恋に落ちるんです。まだ、ひと目も会ったことない人に。

金田 なぜ、そのようなお話に。

大倉 それは、私の趣味です。

金田 素敵です。

大倉 ありがとうございます。

金田 どうも。失礼致しました。ごめんください。

大倉 ……あの。こちらもひとつ、いいですか。

金田 ええ、なんでもどうぞ。

大倉 どなたでしょうか。

金田 ……といいますと。

大倉 私たち、二人でお話してました。すると、あなたが――

金田 金田です。

大倉 金田さんが、入ってこられた。これは、どういうことでしょうか。

金田 ああ、ああ。なるほど。僕はさつき、息子から電話を受けていました。電車に、鞆を忘れてしまった。二十万円入っていたので、困ったことになってしまった。

金田 僕に息子はいませんが、それは確かに困ったぞ、出来る限りのことはしよう。窮地に置かれた人間を、無碍にできるものでしょうか。そうやって、振り込み口座を聞いてると、なんとということでしょうか。あちらの声が、どんどんと遠ざかり、ついには消え入ってしまった。そのかわり、あなたたち二人の声が、やがて輪郭をもって、聞こえてくるものですから。つついっし耳を。

大倉 不思議なことも、ありますね。

金田 これもなにかの、ご縁でしょうか。

大倉 ええ、では。

金田 あの。失礼かとは、思いますが。もうひとつ、質問が浮かびました。

大倉 なんですしょう。

金田 ちかさんは、なぜ大倉さんに会わないのでしょうか。

大倉 私には、なんとも。

金田 このお話は、大倉さんが考えたのでは。

大倉 考えたのは設定までです。あとの会話は、成り行きというか。

金田 成り行きですか。
大倉 だけど、おれも気になるな。
糟谷 ……
大倉 なんでだい、ちかちゃん。
糟谷 ……分かります。
大倉 分からない。
糟谷 ごめんなさい。
金田 それならそれで、いいんですけど。
大倉 それはちょっと、おかしくないか。
糟谷 ……
大倉 おれがあんなに説得したのに。あれほど誠意を見せたのに、よく分からずに、断ったのか。
糟谷 ごめんなさい。
金田 ですが、これはお芝居です。金星人の心理なんて、彼女にだって分かり兼ねます。
大倉 これがお芝居と言えるでしょうか。登場人物の気持ちも分からず、演じることなどできるでしょうか。
金田 ……
大倉 君の台詞には、心がこもってない。
糟谷 ごめんなさい。私、お芝居下手だから。
大倉 うまい下手の話じゃない。君はまだ、金星人になってない。
大倉 恥じらいを感じているね。
大倉 まずは心を開くんだ。そして君は金星人だ。
糟谷 はい。
大倉 宇宙の心で考えてごらん。どうしておれを避けるんだ。
糟谷 ……
糟谷 やっぱり私、分かりません。
大倉 ……
金田 理由がないと、駄目ですか。
大倉 私の納得がいきませんね。
金田 それはそうですが。
金田 ここはひとつ、私が考えましょうか。
大倉 私を避ける理由ですか。
金田 こちらが理由を与えれば、ちかさんのお芝居の方向性も、定まってくるかもしれない。
大倉 なるほど、妙案ですね。
金田 ここ最近、ちかさんに変化はありますか。
大倉 そういえば、話をすぐ切り上げてしまいます。
糟谷 パートが長くなっただけです。だから、夜遅くなった分。
金田 パート。なんのパートでしょう。
糟谷 弁当屋です。
金田 金星にも、弁当屋はあるんですね。
糟谷 いえ、自分の話です。
大倉 金星の話をしてるんだ。私生活を出さないでくれ。
金田 話をすぐに切り上げるのは、なにか関係がありそうですね。
大倉 なんだか、口調も冷たいもんな。
金田 お仕事が忙しいのでは。
大倉 金星の、ですか。
金田 残業が多くなっただけです。だから、夜遅くなった分。

大倉 それはいいですね。金星には、ちかちゃんしか住んでません。会社というものが、ないんですよ。
金田 なるほど。

金田 もしかしたらあなたの他に、惹かれるものがあるかもしれない。
大倉 惹かれるもの。

金田 これは僕の邪推ですが。惹かれる男がいるかもしれない。
大倉 男。そういうことですか。

金田 気分を悪くしたら、謝ります。

大倉 大丈夫です。ですが、金星には、ちかちゃんしか住んでません。他に男などいませんよ。
金田 越してきたりはしませんか。

大倉 越してくる。

金田 火星とか。

大倉 火星などいるものか。あなたの話は、いい加減馬鹿げてる。

金田 すみません。

大倉 ちかちゃんが、男と会うことはありません。そうだよね。

糟谷 ……はい。

金田 うーん。

金田 僕、恐ろしいことを思いついてしまいました。

大倉 ……なんですか。

金田 事の顛末はこうです。実は、ちかさんは地球に来ていた。

大倉 え、そんなことは聞いてません。

金田 ですから、秘密のうちに、来ていたのです。その目的は、可愛らしいもの。あなたを驚かせようとしたんです。しかし、あなたへ辿り着くことはなかった。
大倉 なぜでしょう。

金田 その前に、他の地球人の男と、運命的な出会いをしまったのです。
ちかさんは、あなたに会わず帰っていった。その男を連れてか、そうでなくとも、後ろ髪をひかれて。

金星の夜空に輝く地球を見て、思い馳せるのは、あなたのことではありません。

大倉 ……

金田 どうでしょう。

大倉 感服しました。どうもありがとう。

金田 解決できてよかったです。ごめんください。

金田、劇場を去る。

大倉 あの男の話は、いい加減馬鹿げてる。ちかちゃんは、なにも気にしなくていいよ。
糟谷 そうね。

大倉 純粹に、なぜちかちゃんは避けるのか、気になっているだけなんだ。

糟谷 そうね。分かってる。

大倉 分かってくれて、嬉しいよ。

糟谷 でもやっぱり分からない。どうしてそんな、些末なことを、気に掛けることがあるかしら。

大倉 おかしいかい。

糟谷 それがやっぱり、分からないの。

大倉 ……いざれ話そうと思ってたんだ。ただちよつと、ゆくゆくは、家庭を持ちたいとね。

糟谷 ……金星人との。

大倉 ……そう。そうだね。金星人との。

糟谷 ……

大倉 いや、難しいとは分かっているよ。でも今、国際結婚とか、増えてきたし。だから、君と、会ってみたいんだ。

糟谷 ……

大倉 すぐについてわけでもないんだよ。

二人、黙す。

妃星、おもちゃの車を投げ、大倉に当てる。

糟谷 ごめんなさい、ちよつと切りますね。

大倉 ……そう。じゃあまた今度。

糟谷、電話を切る。

糟谷 車は人に投げないの。

二人、ハンバーガーを食べる。

「すごい機械」

労働者たち

劇場の中に、工場の生産ライン。

労働者たち、機械を作っているが、何の機械か、見当がつかない。作業にふける。

労働者は統御され、やがて機械になっていく。

終業になりバスで帰る。

「北京の猿」

糟谷
先生
妃星
心菜
少年

1

劇場には保育園。

糟谷・先生、教室の前の廊下で話している。

教室の中には、妃星と心菜。しりとりをしている。

糟谷 あの子、馴染めるでしょうか。

先生 大丈夫ですよ。途中入園のお子さんも、結構多いんで。

糟谷 その、それもそうですけど。例えばあの子の性格とか。

先生 妃星ちゃん、とってもお喋りで。まだ三日も経ってないのに、心菜ちゃんと仲良くなって。

糟谷 心菜ちゃん。(教室の中を見て) ああ、あの子。

先生 人見知りとかしないんですね。

糟谷 すいません。

先生 いいことじゃないですか。私にも、色々話してくれますよ。

糟谷 先生になに話しました？

先生 あは、色々。

糟谷 ……あんまり目立たないよう言ってますけど。

先生 なんです。

糟谷 だからその、いじめとか。

先生 いや、そんな。みんな小さなお子さんですから。まだいじめなんてしませんよ。

糟谷 そうじゃなくて、私が。

先生 はい？

糟谷 私がいじめられたりしないでしょうか。

先生 ……

糟谷 他の子の親とかに。

先生 ……問題ないと思いますよ。

糟谷 ならいんですけど。

先生 ええ。

糟谷 過去に、そういう例はありましたか？

先生 どうでしょう。

糟谷 特に、私のような者が。

先生 私どもは、把握してないですが。

糟谷 そうですか。

先生 でも、妃星ちゃんの場合は、安心してください。

糟谷 あの子は逞しく生きる子です。なにも心配に及びません。

先生 ならいんですけど。

糟谷 ……じゃ、9時半には迎えに来るんで。お願いします。

先生 あ。(教室の窓を開け) 妃星ちゃん、ママにバイバイって。

妃星、しりとりを中断するも動じない。
糟谷、去る。

先生、糟谷を見届けて去る。

2

教室内。

妃星・心菜、しりとりをしている。

心菜 ……

心菜 ルネサンス。

妃星 ストール。

心菜 ……

心菜 ルービックキューブ。

妃星 ブルーギル。

心菜 ……

心菜 ルート66。

妃星 クロール。

心菜 ……

心菜 ルツコラ。

妃星 ランバ・ラル。

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 ……

心菜 知らないよ。

そんなの、見たことも、聞いたこともない。

妃星 北京にしかないのよ。

妃星 ……私の父は、貿易商なの。だから私は昔から、海外を転々としてきたわ。

妃星 生まれはモスクワ、育ちはミャンマー。

心菜 へえ。

妃星 それで北京に住んでたの。三歳半から四歳半。そこで、漢方売ってたおじいさん、いつも私にこう言ってたわ。

心菜 なになに。

妃星 北京の猿の話は聞くな。

心菜 どういうこと。

妃星 北京の猿と話を聞くと、病気になってしまうの。

心菜 病気。……病気がって。

妃星 北京の猿の病気。

心菜 なにそれこわーい。

妃星 この世で最もおぞましいものよ。

心菜 ほんとの話？

妃星 全てほんとよ。

心菜 分かったわ。

妃星 北京の猿。

心菜 ループ。

妃星 プール。

心菜 言った。

妃星 ……

妃星 (窓外を見て) 北京の猿だ。

心菜 なんてこと。

妃星 ……

心菜 いたの、北京の猿。

妃星 グラウンドを走り抜け、あそこの茂みに入ったわ。

二人、窓に張り付いて外を見る。

妃星 まだあの中にいるかしら。

心菜 でも北京の猿は、北京にしかないんですよ。

妃星 ついに日本海を渡ってきたのね。

心菜 そんなことってある。

妃星 恐ろしいことになってしまった。

心菜 ね、ひとつ提案があるの。

妃星 なに。

心菜 私たちで捕まえましょうよ。

妃星 駄目、とてもおぞましいのよ。

心菜 話を聞かなぎやいんでしょ。私が茂みに手をつっこむから、妃星ちゃんは私の耳、押さえてて。

妃星 駄目、それは危険すぎるわ。

心菜 完璧な作戦じゃない。

妃星 北京の猿は、人を喰うの。

心菜 そんなこともするの。

妃星 ええ、とてもおぞましいのよ。

心菜 だって、話がそいつの武器じゃない。

妃星 いわば、あいつの最終手段ね。こいつは話が分からないってときは、容赦ないわ。

心菜 いったい、どうすればいいの。

妃星 このまま放っておくしかないわ。

心菜 でも、誰かと出くわしたら。

妃星 あいつは、人目に出たがらない。やってきた者に、茂みから、話しかけるの。

心菜 なるほどね。

妃星 だから、不用意に近づかなければ。

グラウンドの一角からサッカーボールが飛んできて、茂みに入る。

心菜 あ、ボール。

少年、茂みに歩いてくる。

心菜 駄目、そこに入ったら。

少年、茂みに潜っていく。

妃星 見ちゃ駄目。

妃星、心菜の頭を下にひっこめる。

少年、まるつきり茂みに入る。

妃星 喰われた。

心菜 なんてこと。

妃星 せめて、祈ってあげましょう。

二人、合掌する。

心菜 私、こうしてはいられない。

妃星 ……

心菜 北京の猿を、白日の下に晒しましょう。

心菜、窓を開け、教室を出ようとする。

妃星 待つて。私も行かせて。

心菜 ……

妃星 お願い。

心菜 分かったわ。

妃星 そして、私が捕まえるから。心菜ちゃんは、耳を押さえて。

心菜 危険すぎるよ。

妃星 私は、落とし前をつけたいの。

心菜 ……分かったわ。

二人、窓から教室を出て茂みの前へ。
妃星、膝をつき、茂みに手をつっこみ、中を探る。
心菜、後ろから妃星の耳を押さえる。

心菜 慎重にね。

妃星 うん。

心菜 ……いる？

妃星 もっと奥かも。

心菜 ……

妃星、黙って探る。

少年、茂みから出てきて、去る。

心菜 北京の猿？

妃星 あれは違う。

心菜 ……

妃星 ……

妃星 もっと左。

心菜 ……

妃星 ちよっと右。

二人、黙して探り続ける。

「オーソンとアダムスキー」

大倉

伝道者

明子

美羽

1

劇場には、棚が立ち並ぶ、レンタルビデオ店、夜。

大倉、店内をうろろしている。

大倉、人目を盗み、アダルトコーナーに入る。

中は無人。

大倉、一つの棚の前に立ち、いくつかDVDを手取る。

伝道者、アダルトコーナーに入って来る。

伝道者、大倉の真横に並び、DVDを手取る。

大倉、他の棚に移り、DVDを手取る。

伝道者、再び大倉の真横に並び、DVDを手取る。

大倉、また別の棚に移り、DVDを手取る。

伝道者 へえ。

大倉 (DVDを棚に戻し、別を取る)

伝道者 ふうん。

大倉 (DVDを棚に戻し、別を取る)

伝道者 あそう。

大倉 (DVDを棚に戻し、別を取る)

伝道者 (鼻で笑う)

大倉 なんなんだお前は。

伝道者 情けない。情けないですね。

伝道者 人目を忍んでのれんをくぐり、人目を気にしてビデオを選ぶ。

伝道者 マニアックなのが好きなのに、結局借りるは王道ばかり。

伝道者 情けないですね。

大倉 ……

大倉 なんなんだお前は。

伝道者 この場をともにする者は、言ってみれば裸の付き合い。自分の性癖くらい、包み隠さずいきましようや。

伝道者 え。ほんとにいいの、それで。

大倉 悪いか。

伝道者 僕のおすすめはこれ。(DVDを大倉に見せる)

伝道者 夫の前で妻が、5。

伝道者 イン湘南編。

大倉 こんなの、全部偽物だろ。

伝道者 あらー、あらあら。そういう感じ。リアリティとか、求める感じ。

大倉 ……悪いか。

伝道者 いや、あなたは分かかってないな。僕だってそんなの、承知ですよ。素人とは、すべからくプロだ。

伝道者 でもね、それを楽しむんです。嘘を嘘として、楽しむんですよ。

大倉 ……

伝道者 これ、差し上げます。(DVDを大倉に渡す)

伝道者、去る。

大倉、DVDを見つめる。

2

劇場には、大倉の自宅、ダイニングが現れる。

大倉、テレビでDVDを再生し、自慰をしている。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 (リモコンを手に取り、少し飛ばす)

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉、思いを馳せる。

ダイニング、昼。

大倉・明子・美羽・伝道者、食卓についている。
食卓には焼肉。テレビはのど自慢。

明子 パパ、焦げちゃうよ。

大倉 ……ああ、うん。

明子 ねえちよっと堅いかな。

大倉 どれ。

明子 (箸でプレートを指し) こっちがアメリカ。こっちが国産。

大倉 どれどれ。

大倉 (アメリカ肉を食べる)

大倉 うーん、結構脂身が多いな。

明子 (国産肉を指して) 美羽はこっちの食べな。

美羽 うん。

大倉 ほーら。(肉を取って美羽の皿へ)

美羽 (肉を食べる)

美羽 美味しい。

大倉 美味しい? パパも食べていい?

美羽 うん。

大倉 (国産肉をとる)

明子 (テレビに向かって箸を指し) 不合格。

大倉 (テレビに向かって箸を指し) 合格。

大倉 (肉を食べる)

明子 ……

明子 えーなんで。さっきの方が上手いの。

大倉 美味いねえ。

明子 あ、再来週の日曜日、空いてる。

大倉 再来週。何あんの。
美羽 授業かんさん。
大倉 あ、授業参観か。
明子 授業参観は、二人で行きましょう。
大倉 そうだね。
美羽 でね、授業かんさんで、家族について、発表するの。
大倉 へえ。
明子 すごいじゃない。
美羽 でねでね、パパとママに、質問があります。
明子 なになに。
美羽 パパと、ママは、なんで、結婚したんですか。
明子 えーなにそれ。
大倉 そんなこと聞かれるのか。
美羽 なんてなんで。
明子 えーなんだろ、忘れちゃった。
大倉 ひどいなママは。
明子 パパのこと、すぐ好きになっちゃったもの。ほら私、恋愛体質だから。
一同 (笑う)
美羽 じゃあパパは？ 覚えてないの？
大倉 覚えてるよ。
明子 なになに。
美羽 なになに。
大倉 これ、ママにも言ったことないよ。
明子 気になる。
美羽 気になる。
大倉 ……ママは、パパの、憧れの人に似てたんだ。
明子 憧れの人？ だれそれ女優？
大倉 まあ、有名人かな。
明子 えーやだー。
美羽 やだー。
明子 だれ。なんて人。
大倉 ……オーション。
明子 オーション？ だれそれ外国人？
大倉 外国、まあ近いかな。
明子 もう、セレブに似てるだなんて。ねえその人ってどんな人？
大倉 オーションは、金星人だよ。
明子 金星人？
大倉 1952年、かの有名なアダムスキーは、UFOと出会うんだ。砂漠に着陸した円盤から出てきたのが、
金髪の美女オーションさ。
明子 ……
大倉 ロマンじゃないか。
明子 ……私が、宇宙人だっというの。
大倉 宇宙人じゃない、金星人だよ。
明子 ありえない。
大倉 ……
大倉 (国産肉を明子の皿へ) 国産一枚。

明子 ……

大倉 (更に肉を皿へ) 国産二枚。

明子 ……

大倉 (更に皿へ) 国産三枚。

明子 のった。(肉を食べる)

大倉 こういうところが可愛いよねえ。

明子 べえだ。

美羽 でもそれ、絶対嘘だよ。

大倉 なが。

美羽 金星人なんて、絶対嘘だよ。

大倉 はは、いや、そうだけど。

大倉 そうだけど、それを楽しむんだ。嘘を嘘として、楽しむんだよ。

美羽 ふうん。

明子 美羽、授業参観で、ママは宇宙人なんて言わないでよね。

美羽 やだ、言うー。

明子 もう、変なこと教えて。

一同 (笑う)

大倉 あの、パパもひとつ、いいかな。

明子 なに。

大倉 (伝道者に) どなたでしようか。

伝道者 ……といえますと。

大倉 私たち、日曜日のお昼、のど自慢を見て、焼き肉を食べています。すると、あなたがいらっしやる。これはどういうことでしょう。

明子 そう、話そうと思ってたんだけど、私たち、ちよつと別れましょう。

大倉 ……どういふこと。

明子 私、この人好きになっちゃった。

大倉 ……

明子 いや、良くないこととは分かっているよ。でもほら、私恋愛体質だから。

大倉 …… (伝道者に) あなたは、どういう関係ですか。

伝道者 どういう関係? いや、まあ。

明子 そういう関係なの。

伝道者 そういう関係です。

大倉 ……

伝道者 (明子を指して) 結構脂身多いですね。

明子 もう、どうせ私はアメリカ肉よ。

大倉 ……おれは、どうすればいい。

明子 だから、ちよつと別れましょう。

明子 (テレビを箸で指して) 不合格。

伝道者 不合格。

美羽 不合格。

大倉、リモコンを手に取り、音量を上げ、テレビを観る。

明子・美羽、去る。

大倉、自慰に戻る。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

伝道者 どうですか。

大倉 ……うん。 ……うん。 ……ああ。

伝道者 (自慰を始める) 結構良くないですか。

大倉、伝道者を無視して自慰を続ける。

「運河のドライブ」

大倉

金田

糟谷

従業員1

従業員2

劇場では、大倉、自慰をしている。

大倉、やがて、劇場を彷徨う金田に気づく。

金田、暗闇を探り続けている。

金田、電話を掛ける。

金田 あ、林原さん。

金田 ……

金田 今、お時間宜しいですか。

金田 ……

金田 では、手短に話します。

金田 僕は、迷ってしまいました。じきに死にます。

金田 ……

金田 僕が死んだら明日から、ラインが空いてしまいます。ですので、林原さんに報告を。

金田 ……

金田 しない方が良かったですか。

金田 ……

金田 はい。

金田 ……

金田 ですから、道に迷ってしまいました。

金田 ……

金田 今は、工場の中にいます。

金田 ……

金田 工場のどこかは分かりません。道に迷ってしまったので。

金田 ……

金田 来た道を辿ろうにも、完全に方向を失いました。もう、迷い始めた場所にも戻れません。

金田 ですので僕は、ここで暮らすことにしました。

金田 ……

金田 どうせ外に戻れないなら、ここで快適に暮らす方が、懸命ではないでしょうか。

金田 ……

金田 携帯の充電も切れたら、いよいよ僕は、外との交信が途絶えます。実質、死んだと思ってください。

金田 ……

金田 今までお世話になりました。

金田 ……

金田 はい。

金田 ……

金田 はい。

劇場には、糟谷も現れている。

糟谷、電話している。

糟谷 もしもし。

糟谷 ……

糟谷 あ、先生。お世話になってます。

糟谷 ……

金田 はい。

糟谷 すいません、今仕事中で。あとで掛け直しますんで。

糟谷 ……

糟谷 はい。

金田 はい。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

金田 そうなんですよ。

糟谷 ……

糟谷 それは、どういうことでしょうか。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

糟谷 教室から出てこないんですか。

糟谷 ……

糟谷 その中にいるのは、本当に妃星なんですね。

金田 そうなんですよ。

糟谷 そうですか。

糟谷 ……

糟谷 すいません、ご迷惑をおかけします。

糟谷 ……帰ったら、叱つときます。

糟谷 ……

糟谷 あ、出てこないんですね。

糟谷 ……でもそのうち、出てきませんか。

糟谷 ……(腕時計をみる)

糟谷 ああそうですか。

糟谷 ……

金田 はい。

糟谷 ……

糟谷 いつになったら、出てくるでしょうか。

糟谷 それに合わせて迎えいくんで。

糟谷 ……

糟谷 あ、私も、行った方がいいんですか。

金田 え、来てくれるんですか。

糟谷 でもまあ、私が行ったところで、どうにもなりませんよね。

糟谷 ……

糟谷 そうでしょうか。

金田 そうなんですよ。

糟谷 私、行った方がいいですか。

金田 ぜひぜひ。

糟谷 ……

金田 いや、どうか来てください。

金田 ……

金田 僕も、助かりますよ。

糟谷 そうでしょうか。

金田 はい。

糟谷 でも私、今仕事中で。

金田 そんなの関係ありますか。

糟谷 ……

金田 僕のところに来てください。

糟谷 ……

糟谷 分かりました。そちらへ行きます。

金田 ありがとうございます。場所、分かりますか。

糟谷 ……

糟谷 分かりました。

金田 工場に、どのくらいで着きますか。

糟谷 (腕時計を見て) 9時には。

金田 分かりました。

糟谷 タクシーで行きます。

金田 お金、僕から出しますよ。

糟谷 いえ、こちらが迷惑かけてるので。

金田 大丈夫です。来てくれるだけで嬉しいです。

糟谷 ……分かりました。

糟谷 じゃあ、今から向かいます。

金田 お待ちしています。

糟谷 では。

金田 はい。

糟谷 はい！。

金田 はい！。

糟谷 はい！。

金田 はい！。

糟谷 はい！。

糟谷、大倉のもとへ。

糟谷 工場まで。

大倉 ……

糟谷 お願いします。

大倉、運転手に、あたりはタクシーに成り代わる。

大倉 君には、娘がいるのか。

糟谷 ……大倉さん。
大倉 知らなかったな。
糟谷 ……隠してたわけじゃないんです。
大倉 妃星ちゃんか。
糟谷 ……
大倉 でも君は、工場へ行く。あの男に会いに行くのか。
糟谷 そんなつもりはありません。
大倉 そっちを選ぶのか。
糟谷 ……選ぶって。他に何があるっていうの。
大倉 もっと大事なものがあるだろ。
糟谷 ……分かりません。
大倉 忘れたのか。
糟谷 ……
大倉 おれだよ。
糟谷 ……
大倉 おれとこのままドライブしよう。
糟谷 私、金田さんのところ行かないと。
大倉 宇宙の心で考えてごらん。
大倉 あいつとおれ、どっちを選ぶ。
糟谷 ……
大倉 おれにはもう、君しかない。
糟谷 ……
大倉 だからちよつと、会えないかな。
糟谷 ……それはちよつと、難しい。
大倉 電話だけの関係だからか。ひと目も会ったことない男とは、その一線を越えたくないか。
糟谷 いいえ。
大倉 じゃあ何が問題だ。
糟谷 ……
大倉 そうか、お金か。
糟谷 ……
大倉 おれは心底愛しているが、君にとっては商売だもんな。
糟谷 ……
大倉 ……
糟谷 お金の話じゃないのよね。
大倉 そしたら、なぜおれを避けるんだ。
糟谷 分からないわ。
大倉 じゃあどうしろってんだ。
糟谷 私はあなたの金星人よ。あなただけの金星人なの。
大倉 ……
糟谷 金星の夜空に輝く地球を見て、思い馳せるのは、あなたのことだけよ。
大倉 ……
大倉 君はおれのオーソンか。
糟谷 あなたは私のアダムスキー。
大倉 信じていいかい。
糟谷 信じていいわ。

大倉 嘘じゃないかい。

糟谷 嘘じゃないわ。

大倉 じゃあ、おれは待ってるよ。君が地球にやってくる日を。

糟谷 待ってるね。

大倉 心が決まれば、結婚しよう。

糟谷 するわ。

大倉 じゃあこれはハネムーンさ。今夜だけでも、酔いしれさせてくれ。

糟谷 ごめんなさい、工場までお願いします。

大倉 ……

大倉 嘘じゃないか。

糟谷 嘘じゃないわ。

糟谷 私はあなたの金星人よ。

大倉 君のどこが金星人だ。

金田 まあまあ、もういいでしょう。

金田、糟谷の隣に乗り込んでいる。

金田 大倉さんも、落ち着いて。

大倉 なんなんだお前は。(後部座席に向く)

糟谷・金田 (前を指す)

大倉 (前に向き直る)

大倉 ……工場に、いけばいいのか。

金田 はい。僕は今、その中を迷っています。

大倉 ……

金田 僕は今、迷っています。

大倉 おれだって迷ってるよ。

金田 この運河に沿ってけば、やがて工場につきますよ。

大倉 ……

糟谷 どうして迷うことなんてあるの。だって自分の職場でしょう。

金田 ……

金田 今日の昼休み、辺りをふらふらしていると、ふと、管が目につきました。赤と白の、紅白のしましまです。

金田 気にしたことなどなかったのに、今日はなんだか、その管の、行く末が。妙に気になってしまいました。これは、どこにつながるのだろう。この先に、何があるのだろう。

金田 管は、枝分かれ、統合され、無数の管と絡み合い。しかし僕を、工場の深くへいざなうのです。

金田 これ以上いけない。もう戻らねばならない。

金田 しかし、どうやってこの迷路を、絡み合った鉄の迷誤を、戻ることが出来ましょうか。

金田 僕は今、迷っています。

大倉 ちよっと、降りてくれないか。

糟谷 いいのよ。

大倉 いや、ちよっと降りてくれ。

糟谷 いいじゃないの、ちよっとくらい。

金田 すいません、口が過ぎました。

糟谷 いいのよ。今の話、もっと聞かせて。

大倉 なんなんだ、君たちは。

大倉 ……

大倉　　そういう関係か。

糟谷　　……

大倉　　……降りてくれ。

糟谷　　それなら私も降りる。

大倉　　君が降りてどうすんだ。こいつのところに、行かなくていいのか。

糟谷　　私は、金田さんの車に乗ってく。

金田　　……

糟谷　　金田さんの車に乗りたいの。

金田　　（ハンドドルを出現させ、運転する）

大倉　　……

大倉、去る。

金田　　いいんですか。

糟谷　　……

糟谷　　あの人は、私のお客さんなの。

金田　　お客さん。

糟谷　　電話をすれば、一時間あたり三千円。こうやって小銭稼ぐのよ。

金田　　……

糟谷　　汚い手よね。

金田　　そんなことはありません。それなら、僕の手の方が。

糟谷　　……綺麗な手よ。労働者とは、すべから綺麗ね。

金田　　いや。

糟谷、車窓を眺める。

糟谷　　この、運河の先に、金田さんの工場があるの。

金田　　はい。

糟谷　　あの先の、光の中に？

金田　　あれが全て、工場の群れです。

糟谷　　……

糟谷　　ねえ、金田さんは何してるの。

金田　　なに。

糟谷　　金田さんは、何を作ってるの。

金田　　……そんな、何って言われても。

糟谷　　素人には分からないもの？

金田　　いえ。僕にも分かりません。

糟谷　　分からない。分からないの？

金田　　……あの工場の正体は、誰も知りません。全体がどんな構造で、なんのラインがあるのか。

金田　　自分が作っている物の、完成した姿。なんのための機械なのか。

糟谷　　それでも、それを作ってるの。

金田　　僕は、お金を稼げれば十分です。つまりあれば、作るために作られる機械、とでもいいでしょうか。

糟谷　　……そうなのね。

金田　　僕は、ふと思いました。もしかしたらこれは、ある循環なのではないか。僕の組み立てた機械は、別のラインで打ち壊され、また別で組み立てられる。

金田　　一度妄想してしまうと、もう頭から離れない。だから全貌を知るために、工場の深くへ身を投じたので

すが。いささか出過ぎた真似でした。だから僕は反省しました。

金田 自分が何のラインにいて、何に寄与してるのかなんて、関係ないではありませんか。

糟谷 ……そうね、そんなのは些末なことね。

金田 ……なんだか、僕ばかり話してしまつて。……ちかさんは何してるんですか。

糟谷 私。

金田 もつと、あなたの話を聞きたいです。

糟谷 ……

金田 どうか、教えてくれますか。

糟谷 ……

糟谷 金星人。

金田 ……

糟谷 金星人よ。

金田 ……金星にいらつしやるんですね。

糟谷 明けの明星、見たことある？

金田 いいえ。

糟谷 この運河の先の空。あかつきのころの東の空に、白い星が浮かぶのよ。私はきつと、そこにいるの。

糟谷 ……きつとそこにいるのね。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

糟谷 はい。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

糟谷 はい。

糟谷 ……

糟谷 もうすぐです。

糟谷 もうすぐ、そちらに着きますんで。

糟谷 ……

糟谷 まだ妃星は出てきませんか。

糟谷 ……

糟谷 そうですか。

糟谷 ……

糟谷 あ。もう着きましたんで。今からそちらに向かいます。

糟谷 ……

糟谷 ええ。

糟谷 ……

糟谷 はい。

糟谷、タクシーを降りる。

金田、再び劇場を彷徨いだす。

金田 ……林原さあん。

金田、取り残される。

「病気」

糟谷

先生

妃星

劇場には保育園、夜。

教室の外側、窓の前に糟谷・先生、立っている。

糟谷、教室の中を覗く。

先生 見えますか。

糟谷 いいえ、暗くて何も。

先生 おそらく、この中にいると思うんですが。

糟谷 どこからも、入れないんですね。

先生 扉は全く動きません。中からなにか細工がされてて。

糟谷 ……

先生 窓も、鍵が閉まっています。

糟谷 どうするんですか。

先生 手の施しようがないですね。

糟谷 じゃあ、私は何をしますか。

先生 ……呼び掛けたらどうでしょう。

糟谷 ああ。

先生 妃星ちゃん、ママが迎えに来たよ。出ておいで。

糟谷 ……妃星あ。

先生 ……

糟谷 ……

先生 もうちょっと。

糟谷 妃星あ。

糟谷 ……

糟谷 出ておいで。

糟谷 ……

先生 こんな感じで、反応はありません。

糟谷 本当に、いるんでしょうか。

先生 はい、ここにいるとしか。

糟谷 どうするんですか。

先生 すいません。

糟谷 あ、そうじゃなくて。こういう場合は、どうするもんなんですか。

先生 こういう場合ですか。

糟谷 一般的に。

先生 あまり、一般にはないですね。

糟谷 でも、どうにかしないとイケないですよね。

先生 やっぱり、お母さまの呼びかけが一番かと。

糟谷 ……

糟谷 妃星あ。

糟谷 ……

糟谷 出ておいで。そこにいるのは分かっているわ。

糟谷 ……

糟谷 時間の問題よ。

糟谷 ……

糟谷 無理です。

先生 もう、こちらから開けるしかないですね。

糟谷 あ、開けられるんですか。

先生 窓を割って、鍵を。

糟谷 そういうこと出来るんですね。

先生 いわば、こっちの最終手段です。何か、叩くもの探してきます。すぐ戻りますんで。

先生、去る。

糟谷、黙って立っている。

ふと、劇場の奥から、妃星がやってくる。

妃星 危ないところだった。

糟谷 その声は、私の娘、妃星じゃないの。

妃星 そうよ。私はあなたの娘。

糟谷 そんなところで何をしてるの。

妃星 今はもう、私の姿を見せられない。だから暗闇に、姿を隠すほかないの。

糟谷 どうして。ここにきて、あなたの姿を見せてちょうだい。

妃星 いいえ、それは出来ないの。

糟谷 すっかり、みにくい姿になってしまった。

妃星 怪我したの、見せてちょうだい。

糟谷 いいえ、私の姿はみにくいわ。

妃星 ……私は、病気になってしまった。

糟谷 病気。

妃星 どうか、私の話を聞いてくれるかしら。姿は見せられないけれど、私の話を聞いてくれないかしら。

妃星 私の事の顛末を。私の愚弄な失態を。

糟谷 ええ。

妃星 私は昼、心菜ちゃんと遊んでいたわ。

糟谷 心菜ちゃん。ああ、あの子。

妃星 しりとりしていたんだけど、ふと、窓に目をやると、恐ろしいものを見てしまった。

妃星 ……

妃星 北京の猿だ。

糟谷 なにそれ。

妃星 知らないの、北京の猿。

糟谷 知らないわ。

糟谷 そんなの、見たことも、聞いたこともない。

妃星 北京にしかないのよ。

妃星 ……私の父は、貿易商なの。だから私は昔から、海外を転々としてきたわ。

妃星 生まれはモスクワ、育ちはミャンマー。

糟谷 へえ。

妃星 それで北京に住んだの。三歳半から四歳半。そこで、漢方売ってたおじいさん、いつも私にこう言っ

てたわ。

糟谷 なに。

妃星 北京の猿の話は聞くな。

糟谷 どういうこと。
妃星 北京の猿の話の話を聞くと、病気になってしまうの。
糟谷 病気。……病気って。
妃星 北京の猿の病気。
糟谷 ……
妃星 この世で最もおぞましいものよ。
糟谷 そんなものがいたのね。
妃星 そいつは、茂みに入ったわ。
妃星 私は、放っておきましょう。あいつは、人目に出たがらない。だから不用意に近づかなければ。
妃星 しかし、そのとき、恐ろしいことが起きてしまった。
妃星 少年が喰われたのよ。
妃星 私は、心菜ちゃんと腹をくくった。北京の猿を、白日の下に晒しましょう。
糟谷 危険すぎるわ。
妃星 そうして二人で探したけれど、なかなか見つからないものね。心菜ちゃんは戻ってしまった。
妃星 私は残っていたけれど、姿が見えないもんだから、もう去っていったのかもね、私もそろそろ戻ろうかしら。
妃星 ……
妃星 油断していた。
糟谷 ……
妃星 お前、おれの話聞いてくれるか。
糟谷 ……
妃星 叢中の声は、私に語り掛けていた。
妃星 ……
妃星 おれは、存在しなかった。ただ語られるだけだった。
糟谷 どういうこと。
妃星 つまり、口承の中の生き物さ。人々の、語る声がただ身体さ。
妃星 ちようど、北京に病気があってな。顔が赤らみ、耳が大きく腫れ上がる。その様子が猿のようで、北京の猿の話は聞くな。畢竟、ことわざのようなものさな。
糟谷 そうだったのね。
妃星 しかし、病気は流行り出し、北京の猿はますます増えた。おれは、語られすぎちまった。
糟谷 ……どうなったの。
妃星 おれの比重は、現実の中に偏っちまった。
糟谷 ……
妃星 おれは、身体を受けちまった。
糟谷 そんなことってある。
妃星 だから、おれが現れたのも分かるだろう。先刻、お前はおれの話をしたな。
妃星 お前が話をしたからだ。話の中から、おれは現れる。
糟谷 ……
妃星 ……
妃星 話を聞いてはいけないわ。分かっていた、分かっていたのに。
妃星 ……私は、玲瓏なその声に。おぞましく、教奇な運命の話に、聞き入っていた。
糟谷 ……
妃星 こうして私は病気になった。あの声に聞き入ったせいで、すっかり病気になってしまった。
糟谷 ……
妃星 その病気とは、おぞましいもの。私は、北京の猿になってしまった。
糟谷 ……

妃星 私はもう、あなたの娘じゃない。私はもう、北京の猿よ。
妃星 そして、私の話を聞いてしまった、あなたも……
妃星 わ！
糟谷 ちょっとお、やめてよそういうの。
妃星 この話の教訓は三つ。一、最後まで油断するな。二、相手を見て会話しろ。三、悪は滅びる。
糟谷 面白い話だったわ。だからほら、出ておいで。
妃星 ……いいえ、それは出来ないの。
糟谷 怖い話はもう終わり、ね。
妃星 私は、病気になってしまった。
糟谷 ……
妃星 ほんとよ。
糟谷 どういうこと。
妃星 私は、嘘をつきすぎてしまった。
糟谷 ……
妃星 私の比重は、嘘の中に。話の中に偏ってしまった。
糟谷 ……
妃星 私はもう、身体がほとんど消尽してしまった。
糟谷 そんなことってある。
妃星 今はこうして、残り僅かな身体で話している。
糟谷 ……しかし、もうすっかり消えてしまう。残るものは声だけよ。嘘を語る声だけよ。
妃星 ……そんなことって、ある。
糟谷 この話は嘘ではないわ。いいえ、私の話は全て嘘よ。私そのものが嘘なのよ。
妃星 どうしようもないわ。
糟谷 もうあなたとは会えないの。
妃星 そうよ。
糟谷 話すこともできないの。
妃星 ……
妃星 電話なら。
妃星 ……電話なら、いつでも話せる。だって、電話は声だけだもの。身体など、必要ないもの。
糟谷 どこに電話を掛ければいい？
妃星 私に電話は掛けられない。私も電話は掛けられない。だから、他の人との電話の中に、こっそり、忍び込んでみるから。
糟谷 うん。
妃星 忍び込んだら、小さな声で、ちかちゃんって、呼んであげるね。
糟谷 ……うん。
妃星 これは、おぞましい病気よ。
妃星 ……あなたも気を付けて。
糟谷 ……なに。
妃星 あなたはどうなの。
糟谷 ……
妃星 嘘をついてないか。
糟谷 私は何もついてない。
妃星 話の中に入っちゃまうぞ。
糟谷 何も嘘はついてないの。

妃星 お前は消尽しちまうぞ。

糟谷 ついてないの。

妃星 ……

糟谷 ……私は金星人よ。

糟谷 偶然、平凡な男のもとに、私は、間違い電話を掛ける。一本の電話を期に、二人は恋に落ちる。まだ、ひと目も会ったことない人に。

糟谷 私は恋をしているの。大倉さんを愛しているの。

妃星 ……

糟谷 結婚するわ。

糟谷 去る。

先生、やって来て、金槌で窓を割り、手を入れ、鍵を開ける。

先生、窓から教室に入る。

先生 妃星ちゃん。

先生、呼び起こすように、劇場の床を叩く。

先生 妃星ちゃん、妃星ちゃん。

「結婚式」

大倉
糟谷
妃星

1
劇場には棚が現れ、スーパーマーケット、夜。
大倉・糟谷、カートを押して歩いている。

大倉 お酒は？ 何飲む。

糟谷 ごめんなさい、お酒よく分からなくて。

大倉 あんまり飲まない？

糟谷 そうね。

大倉 じゃあ、飲みやすいのがいいかな。

糟谷 うん。

大倉 (商品棚を眺める)

大倉 赤と白、どっちがいい？

糟谷 ……じゃあ、赤。

大倉 (一本を手に取り) これでいいかな。

糟谷 (頷く)

大倉 あと何か、食べたいものは？

糟谷 ううん。

大倉 こんなもんでいいか。

二人、レジに並ぶ。

大倉 あ。…：グラスがないな。

糟谷 グラス。

大倉 うち、長らく独り身だから。ワイングラス、一つしかないや。ちよつとほか寄って帰ろうか。

糟谷 いいよ、なにか、適当なので。

大倉 駄目だよちゃんとやらないと。今日はちゃんと、やらないと。

糟谷 ……そうね。

2

劇場には大倉のマンション、寝室。夜。

部屋の明かりは消され、暗い。

唯一、ベッドの枕元のシェードランプだけがついている。

糟谷、ベランダ窓脇のテーブル椅子に座っている。

テーブルには二つのワイングラス。

大倉、奥の台所から、ワインボトルを持ってきて、座る。

大倉、テーブルの上のグラスにワインを注ぐ。

大倉、グラスを掲げ、乾杯しようとする。

糟谷、微動だにしない。

大倉 まだ、緊張してるかい。

糟谷 いいえ。

大倉 怖いかい。

糟谷 いいえ。

大倉 ……

大倉 後悔か。

糟谷 ……いいえ。

大倉 ……人生は、選択の連続。そう思うだろ。

糟谷 うん。

大倉 つまり人生は、するかしないか。やるかやらないか。

糟谷 そうね。

大倉 そして君は、考えうる限り、最善の選択をした。

大倉 君は選択に勝ったんだ。

糟谷 そうね。

大倉 だからにも、後悔しないでいいんだよ。

糟谷 うん。

大倉 妃星ちゃんも心配ない。いい保育園がいっぱいある。

糟谷 うん。

大倉 そして、おれはいい父親だ。

大倉 休日は公園に連れて行き、平日は娘の寝顔を撫でる。

糟谷 素敵ね。

大倉 授業参観は二人で行こう。

糟谷 うん。

大倉 受験は、彼女の好きなように。

糟谷 ……

大倉 お小遣いは、多めに渡しちゃうかな。

糟谷 素敵ね。

大倉 家の内装はどう。

糟谷 ……

大倉 気に入らなければ、壁紙も替えるよ。

糟谷 いいえ。

大倉 家具も、君の趣味で選んでいい。

糟谷 うん。

大倉 まずは食器を揃えないとな。一通り、三つずつ。

糟谷 ああ。

大倉 なにより、住みよさが大事だからね。気に入らなければ教えてよ。

大倉 このカーテンは。

糟谷 素敵ね。

大倉 ……そうだ、ちょっと見てもらんよ。

大倉 (立ち上がり、カーテンを開ける)

大倉 このマンションは、この街の、隅から隅まで見渡せるんだ。

糟谷 うん。

大倉 あの背の高い建物、見える。

糟谷 ……

大倉 あの薄緑に光ってる。

糟谷 うん。

大倉 まるごと、シヨッピングモールだよ。

糟谷 ああ。

大倉 服も靴も売ってるから、好きなものを買ってあげるよ。

糟谷 そうね。

大倉 向こうのは見える。

糟谷 うん。

大倉 あのかまぼこを立てたみたいな。

糟谷 うん。

糟谷 ……

糟谷 ……

大倉 あそこからはもう海さ。

糟谷 素敵ね。

大倉 足元には観覧車がある。

糟谷 うん。

大倉 あそこ一帯が遊園地だよ。

糟谷 ……

糟谷 ……

大倉 妃星ちゃんも、楽しんでくれる。

糟谷 ああ。

大倉 前は、こんなに綺麗じゃなかった。

糟谷 うん。

大倉 ずっと先。遠くに光が見えるかい。

糟谷 ……

大倉 あれが、工業地帯だよ。

糟谷 うん。

大倉 ここから見渡せる灯りなんて、あのぼんやりした光しかなかった。

糟谷 ああ。

大倉 綺麗になったよ。

糟谷 ……

大倉 君にとっても住みよい街さ。

糟谷 そうね。

糟谷 ……

糟谷 ……

糟谷 うん。

大倉 ワインを飲み干す。

大倉 カーテンを閉め、ベッドに横たわる。

大倉 おいで。

糟谷 大倉の隣に横たわる。

大倉 シェードランプを消す。

二人、しばし黙す。

糟谷 今度は、私の話を聞かせてあげる。

糟谷 ……
糟谷 私の半生は、娘とともにあった。むしろ、娘しかいなかったと言ってもいいわ。私は娘に身を捧げ、娘は私のために生きる。素晴らしいじゃないの。

糟谷 ……
糟谷 全てはあの夏、あの夏の夜から始まった。いいえ、全てが終わったの。あの夜、私は夫から逃げ出した。
糟谷 ……
糟谷 何のことはない、人が変わってしまっただけよ。娘を抱える私の腕は、痛ましい痣でいっぱいだったわ。
糟谷 ……
糟谷 私たちは身一つ、社会の迷誤に放り出された。でも、それが何だっというの。健全な体をもって、私たちは生きてきた。

糟谷 ……
糟谷 それなのに。
糟谷 ……
糟谷 一体、どうしてこうなったのかしら。

糟谷 ……
糟谷 私たちの幸福は、どこへ行ってしまったのかしら。
糟谷 ……
糟谷 この下賤な男。鼠のように卑劣な男。このいやらしい手。
糟谷 ……
糟谷 私はこの男を、決して許さない。

糟谷 ……
糟谷 うん。
糟谷 ……
糟谷 うん。
糟谷 ……
糟谷 ああ。

糟谷 ……
糟谷 そうね。そんなのは些末なことね。

糟谷、ベッドから出、ベランダ窓を開け、劇場に立つ。

糟谷 ……
糟谷 ここからね、明けの明星が見えるの。

糟谷 ……
糟谷 あかつきのころの東の空に、白い星が見えないかしら。
糟谷 ……
糟谷 あなたのところから見えないかしら。

糟谷 ……
糟谷 あそこには、どうやって行けばいいかな。

糟谷 ……
糟谷 遠くの運河の流れに乗って、辿り着いたりしないかな。

糟谷 ……
糟谷 金星についていたら、あなたに電話するね。それを合図に、私たち。

糟谷 ……
糟谷 そうね。

糟谷 ……
糟谷 うん。 ……うん。 ……ああ。

糟谷 ……
糟谷 うん。 ……うん。 ……ああ。

糟谷 ……
糟谷 うん。 ……うん。 ……ああ。

糟谷、延々と、うん、ああと相槌を繰り返す。
妃星、劇場の奥からやって来る。
糟谷、相槌をやめる。

妃星 ちかちゃん。

妃星 ……

妃星 ちかちゃん。

糟谷 ……

妃星 ちかちゃん。

糟谷 ……

糟谷 行こうか妃星。

糟谷・妃星、劇場を去る。

大倉、微塵も動かない。